



東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター

The Newsletter CNEAS

第 65 号

● 目次 ●

巻頭言 ソウル国立大学校アジア研究所訪問	1
最近のシンポジウム・研究会等	
東北アジア研究センターシンポジウム 「東アジアの世界遺産と文化資源」	2
国連防災世界会議パブリックフォーラム 「電波科学による防災・減災と地方自治体との連携」	3
東北アジア研究センター 研究成果報告会	4
国連防災世界会議パブリックフォーラム ポスター展示 「無形民俗文化遺産に対する防災人類学・民俗学」	4
台東区立書道博物館との共同企画展	
「中村不折―僕の歩いた道―(後編) 森鷗外、夏目漱石たちとの交流	
並びにギャラリートーク「漱石との交流・漱石門下の人々」	5
東北アジア研究センター共同研究シンポジウム	
「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」	5
センター関連出版物	6-7
客員・新任紹介	7
活動風景「Kuzushiji」と国際交流	8
編集後記	8

巻頭言

ソウル国立大学校アジア研究所訪問

東北アジア研究センター長

岡 洋樹

4月28～30日、ソウル国立大学校アジア研究所を訪問し、講演を行う機会を得た。これは、本年1月に東北アジア研究センターを訪問された同研究所長カン・ミョング（姜明求）教授のお招きで実現したものである。同大訪問はこれが二度目である。最初は数年前に同大学校人文大学のキム・ホドン（金浩東）教授が主催したアジア史に関する国際会議への出席であったが、今回は研究所長としての訪問である。普段モンゴル史を研究している筆者にとって、韓国はあまり訪れる機会のない国だったこともあり、同大の研究者との交流は、とても新鮮な経験となった。アジア研究所は、地域研究をミッションとする組織で、東北アジア研究の部門も設置されている。28日の晩餐では1月に訪問されたカン教授、キム・ジョンチョル（金鍾哲）博士、キム・ヨウミ（金柔美）博士と、同大奎章閣韓国学研究院院長キム・インゴル（金仁杰）教授、同研究所のRA 田村史記氏が同席され、韓国料理に舌鼓を打ちながら東北アジア研究を繞って活発な議論ができた。29日は、講演に先立ち、11時からキム・ホドン教授とコ



ブムジン（丘凡真）教授の計らいで、清代史やモンゴル史を研究している人文大学の学生達との交流の機会が与えられた。

彼らとの対話から、同大における清代中国史やモンゴル史の研究が着実に進展しており、今後韓国がこの分野で大きな役割を果たすことは確実と思われた。午後4時からアジア研究所国際会議室で開催された講演会は、アジア研究所のチョン・コンスク（鄭根植）教授が司会を務め、同大のコ・ブムジン教授とかつて東北大学大学院法学研究科におられたナム・キジョン（南基正）教授をディスカッサントとして行われた。「歴史的地域概念としての東北アジア：その越境的性格」と題する私の講演は、東北アジアの歴史的形成過程を論じ、それが歴史的な地域概念として定立しにくい背景に、明治期に成立した「西洋史」「東洋史」「日本史」の区分が存在することを指摘したものであったが、両氏からは、韓国における東北アジア理解や、冷戦期の地政学的な事情を背景にもつ韓国の地域認識の事情などについてコメントがあった。とくにロシアやモンゴルを東北アジアに含めることが可能かどうかについて議論がなされた。30日午前中は田村氏の案内で大学博物館を見学した。実に実りの多い訪問であった。カン・ミョング教授はじめ同大の諸先生には心からお礼申し上げたい。



最近のシンポジウム・研究会等

① 東北アジア研究センターシンポジウム
「東アジアの世界遺産と文化資源」
 (2015年2月14日、片平さくらホール)

本シンポジウムは、東北アジア研究センターが例年開催している東北アジア研究センターシンポジウムの一環として開催された公開シンポジウムである。世界遺産に関しては、東北アジア研究センターでは既に2013年度に公開講演会「世界遺産からのメッセージ—平泉・石見銀山の歴史力」を開催しているが、それは対象を日本国内の2遺産のみにしぼり、しかもその登録実現に深く関与した歴史学研究者の視点からの解説を中心とするものであった。今回のシンポジウムはさらにそのテーマを拡大し、日本を含む東アジア全域を言及範囲とするとともに、文化人類学、建築史、地域計画学、人文地理学、文化景観研究など広範な関連諸分野を横断する視点から、世界遺産登録が文化の資源化に対してもつ意味を考えようとしたものである。プログラムは以下の通り。

- 司会・趣旨説明／瀬川昌久
 (東北大学東北アジア研究センター)
- 発表1：中国の世界遺産／
 高山陽子 (亜細亜大学国際関係学部)
- 発表2：世界遺産厳島神社と文化資源の多様性／
 三浦正幸 (広島大学大学院文学研究科)
- 発表3：世界遺産登録の定住型歴史的環境をめぐる論
 点—韓国の良洞村を事例に—／
 姜東辰 (韓国・慶星大学校都市工学科)
- 発表4：植民地期の朝鮮における城郭遺産／
 太田秀春 (鹿児島国際大学国際文化学部)
- 発表5：台湾における「文化景観」の遺産化／
 波多野想 (琉球大学観光産業科学部)
- コメント／大塚直樹 (亜細亜大学国際関係学部)、羽生冬
 佳 (立教大学観光学部)、稲村務 (琉球大学法
 文学部)、藪田貫 (関西大学大学院文学研究科)

現在、地球上のほぼあらゆる人間社会において、「文化」は20世紀前半の文化人類学者が信じたような意味における自己完結的に閉じた体系ではなく、多かれ少なかれ当事者以外の第三者が介在し、発見されたり評価されたり享受されたりする対象となっている。すなわち、世界各地の有形無形の文化的構築物は、もともとそれを生み出した人々がそこに付与した宗教・儀礼上の意味や彼らにとっての生業基盤上の価値に加え、他者にとっても好奇と関心の対象としての存在意義をもつものとみなされるようになっており、



シンポジウムの看板



シンポジウム会場の様子

学術研究者や観光客、さらには政府や産業関係者のまなざしが絶えず注がれ続ける対象となっている。そして現地の住民自身もまた、そうした他者のまなざしを一種の反射鏡として、自らの「文化」を対象化し、それを誇りや自己意識の拠り所としたり、観光を通じて利益を得るための道具としたりするようになっていく。

日本、韓国、中国等、東アジアにおいてもこうした動向は例外ではなく、文化の保全と資源化こそが、政府にとっても一般民衆にとっても極めて高い関心の対象となっている。本シンポジウムでは、東アジアのそれぞれの地域において世界遺産登録や文化の資源化の実例を具に観察してこられた専門家による報告と討論を通し、それぞれの国・地域の現状がもつ特性と、共通の課題を確認し、それらを共有することができた。そして、世界文化遺産登録と文化の資源化をめぐる諸現象について学術的に検討を行う上で、「東アジア」という地域的な枠組みを設定して考察を進めることが大きな有効性をもつことを確認することができた。日ごろ世界遺産や文化の資源化に関わる研究をしていても、自分自身の調査対象や専門分野を超えた知識や意見の交換の機会が限られがちの参加者各自にとって、貴重な交流の場となった。また、前夜半に雪の降るあいにくの天候であったにもかかわらず、数十名の熱心な一般市民のみなさんの参加を得た。なお、同シンポジウムの内容は、東北アジア研究センター研究報告の1冊として現在編集作業が進められており、2016年初には刊行される予定。(瀬川昌久)

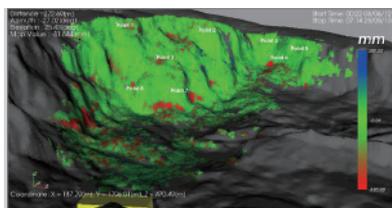
② 国連防災世界会議パブリックフォーラム 「電波科学による防災・減災と 地方自治体との連携」 開催報告



2015年3月14日～18日、仙台国際センターを中心に第3回国連防災世界会議が開催されました。同会議は、国際的な防災戦略について議論する国連主催の会議です。国際会議に平行し、政府機関、地方自治体、NPO、NGO、大学、地域団体など、国内外の多様な主体による防災や減災、復興に関する取り組みを一般公開により広く発信するためパブリック・フォーラムが開催されました。会議期間中、さまざまなシンポジウムやセミナー、展示等が行われ、350を超えるイベントに、のべ15万人以上が参加しました。

佐藤研究室ではこれまで「減災をめざした電波科学研究ユニット」の活動を進めてきました。<http://magnet.cneas.tohoku.ac.jp/satolab/researchunit/> 東日本大震災に伴う住宅の高台移転に際し、緊急を要する多数の遺跡調査が見込まれるなど、効率的な遺跡調査を行うための新技術が社会的に強く必要とされています。本プロジェクト研究ユニットでは地中レーダーなどの先端的な地下計測手法を利用した遺跡調査技術の開発と、地方自治体の遺跡探査への実践的な技術協力、技術指導による文化財保護の実践をめざしています。

大規模な調査を短時間行う手法として東北大学災害科学国際研究所の支援を受け、2013年2月に遺跡探査用アレイ型地中レーダー(GPR)「やくも」を完成させました。既に東松島町、名取市、山元町、南相馬市などで震災復興に関連する遺跡ならびに地下調査を実施しました。また宮城、福島、岩手の県警と協力して、東日本大震災の津波被災者捜索活動を行っています。国内では使用実績がほとんどなかったアレイ型GPR装置を新たに導入することで効率的な計測が実現できることを実証し、大規模遺跡調査技術と東北大学が開発した高精度調査3DGPR技術の組合せを東北地域全体に普及させることも重要な活動です。また東北大学内の埋蔵文化財調査に係わる埋蔵文化財調査室などとも連携をとり、センター外部に開かれた活動を展開しています。こうした技術は東北アジア地域における大規模自然災害に対しても利用可能であり、ロシア、中国、韓国の研究者との交流も推進することを考えています。また、2011年以来、宮城県栗原市と協力して岩手・宮城内陸地震で発生した荒砥沢大規模地滑り地帯のレーダーによる



レーダーが捉えた荒砥沢地域の表面変位

モニタリングを進めてきました。

こうした実績に基づき、私たちは「国連防災世界会議パブリック・フォーラム：電波科学による防災・減災と地方自治体との連携」を国連に提案したところ、開催を公式に認められ、2015年3月15日に仙台市民会館 会議室において、自治体、警察関係者など35名を集めてフォーラムを開催しました。

本フォーラムではレーダーで得られた防災・減災のための情報を地方自治体に提供する仕組みについて東北大学が実践してきた事例を通じて、地方自治体の皆様と情報伝達がどうあるべきかについて考察します。地滑りや火山活動に伴う地殻変動などの計測ならびに、震災復興に伴う遺跡調査や津波被災者捜索への利用について宮城県、福島県、岩手県での活動を紹介し、その利用を展望しました。

以下が当日の講演内容です。

- ◎東北大学における電波技術の防災・減災への利用
佐藤 源之 (東北大学 東北アジア研究センター 教授)
- ◎平成20年岩手・宮城内陸地震と栗原市の対応
佐藤 喜久男 (栗原市 総務部 次長兼危機管理監)
- ◎荒砥沢崩落地における東北森林管理局の取組み
飯島 康夫 (東北森林管理局宮城北部森林管理署宮城山地災害復旧対策室室長)
- ◎東日本大震災と宮城県における遺跡調査
佐久間 光平 (宮城県教育庁 文化財保護課 技術副参事兼技術補佐)
- ◎東日本大震災における行方不明者の捜索活動
渡邊 嘉則 (福島県警察本部 警備部 警備監)

本フォーラムでは、自治体、警察などそれぞれの立場からレーダー技術を用いた実践的な事例と、こうした技術の重要性について議論が交わされました。(佐藤源之)



パブリック・フォーラムの会場

3 東北アジア研究センター 研究成果報告会

2015年3月24日、東北大学片平北門会館にて、東北アジア研究センターの2014年度研究成果報告会が開かれた。この報告会は、年に一度、プロジェクトユニットの事業内容、所内共同研究、公募共同研究、個人研究の進捗状況について発表する企画である。東北アジア研究に関わるセンター内外の研究者交流を深めることで、研究所組織としての本センターの研究の拡張性と連携性を強化することを目的として行われている。

今年度はユニットの事業内容についての報告8本、共同研究報告18本、自由論題でのポスター発表7本で構成された。合計35の発表が、午前10時から午後6時まで、熱心な質疑応答とともに行われた。

ユニットの報告は、運営や活動についてのもので、センターの研究活動が、学際的かつ他部局・他機関と積極的に共同している状況をしめすものだった。共同研究報告は、「文化交流セッション」(3本)、「歴史セッション」(4本)、「社会と民族誌セッション」(4本)、「震災セッション」(3本)、「政治経済セッション」(4本)で構成された。昨年度から学内の共同研究は、兼務教員を主体するものも認めることになったこと



もあり、文学研究科の木村敏明教授、川口幸大准教授それぞれが主催する共同研究も発表された。また4本の公募共同研究の成果についても報告が行われた。ポスター発表は、理系分野が5本、文系分野から2本だった。

昨年度から、セッション方式で報告会を始めたが、センターの研究活動の相互関係、さらにどのように構造化しているのかみえるようである。字数の都合で、発表内容全部を紹介することは残念ながらできないので、詳しく知りたい方は以下のURLを見て欲しい。<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2014/img/session/2014houkokukai.pdf>

最後に個人的に印象に残った発表を上げておきたい。それは公募共同研究の「畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバル化」である。発表者は北星学園大学の風戸真理氏で、モンゴルの物質文化フェルトの伝統的と現代的利用についての発表だった。映像も美しく、フェルトがグローバルな観光産業と結びついている様子とそれに対応する牧民の姿が生き生きと描かれる発表で大変おもしろかった。

(高倉浩樹)

4 国連防災世界会議パブリックフォーラム ポスター展示 「無形民俗文化遺産に対する防災人類学・民俗学」 (3月14～18日、東北大学川内北キャンパス A102)

2015年3月14日から18日にかけて仙台市で開催された国連防災世界会議(The UN Conference on Disaster Risk Reduction)のパブリックフォーラムに、災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究ユニット(代表:高倉浩樹)はポスターを出展した。パブリックフォーラムとは大学等の研究機関や企業、各種行政部局、NGO、NPO等々が情報の発信と共有を目的として、会議本体に付随して開催するプログラムである。聴講に関して原則的に制限がなく、会場の収容力等が許す限り誰でも自由に参加出来る点に特色がある。開催に先んじて仙台市内では活発な広報が展開されたが、これはパブリックフォーラムが市民参加を趣旨の1つとしているためであり、期間中には国の内外から帰属や立場の相違に関わらず、防災事業に関心を有する様々な人々が仙台を訪れた。

ユニットのポスターは会場の1つとなった東北大学川内キャンパス A102 講義室に、会議期間全日に渡って掲示された。ポスターには無形民俗文化財の調査事業の概要、並びにそこから展開した最新の研究成果を盛り込むとともに、特に行政関係者や企業、一般市民への情報発信を意識し、プ

ロジェクトの社会的意義を含めて広く訴えた。なお国内外からの来訪者があることに鑑み、ポスターに関しては日英それぞれのバージョンを作成した他、展示への理解を助けるためにディスプレイを設置し被災地と無形民俗文化財についてのスライドショーを公開した。



ポスター展示「無形民俗文化遺産に対する防災人類学・民俗学」

ポスター展示の性格上、期間中の詳細な来訪者数などは不明ながら、今回のパブリックフォーラムはユニットが成果を発信する機会として、特に一般社会に向けたものとしては最大規模のものであった。また今回の展示は約1年前に公開を開始したデータベース「みやしんぶん」の広報も兼ねており、こうした継続的な情報発信は大学の研究事業と市民社会を結びつける上で、徐々にその効果を発揮していくものと期待される。

(及川 高)

5 台東区立書道博物館との共同企画展

「中村不折一僕の歩いた道―〈後編〉森鷗外、夏目漱石たちとの交流」 における東北大学所蔵資料の展示(平成27年2月10日～3月15日)、並びに、 ギャラリートーク「漱石との交流・漱石門下の人々」(平成27年2月15日)

東京の台東区立書道博物館は、近代日本において画家、書道家、そして書法研究者として名高い中村不折(1866～1943年)が蒐集した漢字資料群を研究・公開する台東区にある特殊博物館・美術館の一つです。かつてこの地は根岸の里と呼ばれ、上野寛永寺輪王寺宮の庭園でした。明治になると正岡子規が居を構えたことから、子規と親交があった中村不折がこの地に移り住んだと言われています。

平成26年度、書道博物館では、中村不折の回顧展を前編と後編に分けて企画しました。前編では中村不折本人の足跡を辿り、後編では不折と交流のあった文人を所蔵品から紹介するというものでした。当方の「出版文化資料データベース研究ユニット」では、中国の宋元明清の典籍のみならず、明清の絵画資料やヨーロッパ文書などに加えて、日本の明治大正の文人資料もデータベースに収めていたことから、書道博物館の企画展後編とタイアップして会場の一画をお借りし、データベースの実物である東北アジア研究センター所蔵の中村不折書画、東北大学附属図書館所蔵の夏目漱石家族文書を展示しました。同時に、東北大学史料館の曾根原理先生をお

迎え、「漱石との交流・漱石門下の人々」という題目で、午前午後の2回、大正・昭和の仙台文化人の活動や漱石関係資料の紹介を兼ねたギャラリートークを実施しました。東北大学の卒業生でも、夏目漱石関係の資料が本学にあることは知っていても、その実物を見たことのある人はほとんどいないこともあり、明治文人資料、或は、中村不折による書画は、来館者の注目を浴びました。ギャラリートークを通して、東北大学と漱石門下の方々との関係も伝えられ、東北アジア研究センターのみならず、東北大学全体の宣伝にもなったと思われます。石井健夫館長並びに鍋島稲子主任研究員をはじめとして書道博物館の方々には、特別な展示スペースなど様々な配慮をいただき、とりわけ有意義な共同企画展となりました。本誌面をお借りして、感謝申し上げます。(磯部 彰)



中村不折一僕の歩いた道―〈後編〉森鷗外、夏目漱石たちとの交流

6 東北アジア研究センター共同研究

「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現代的研究」 シンポジウム「越境の東北アジア:統治の動揺と地域流動化」 (3月8日)

3月8日(日)、東北大学東京分室で開催されたこのシンポジウムは、科研費基盤研究(A)による共同研究の成果報告会として開催された。東北アジアは、中露二大国による統治を特色とする。本共同研究は、20世紀初頭と20世紀末の二つの変動期の歴史的意義と変動の状況を人やモノの越境移動から検討するもの。今回のシンポジウムでは四セッションで12件の報告が行われた。「越境の様態」セッションでは、今村弘子氏(富山大学)が中朝の経済協力の進展状況を報告し、雲和広氏(一橋大学)がロシア極東の人口減少に、社会主義体制の崩壊に伴う合理性の存在を論じ、松野周治氏(立命館大学)は、中国南部のラオス国境の国境貿易の状況を、北方と比較しながら論じた。続く「移りゆく人々」セッションでは、サヴェリエフ・イゴリ氏(名古屋大学)が、帝政末期の極東への労働力としての移民受入政策を、中村篤志氏(山形大学)が清朝・民国期におけるモンゴル人の越境移動の歴史的な性格を、ボダルコ・ピョートル氏(青山学院大学)が十月革命後の白系ロシア人の中国東北部への移動を論じた。「共生の歴史的経験」セッションでは、白玉双氏(内

蒙古師範大学)が清代に進行した内地からモンゴル南部への漢人の移住によるモンゴル社会の変化を、柳澤明氏(早稲田大



シンポジウム会場の様子

学)が中国東北部の八旗旗人の複合的アイデンティティを論じた。井上治氏(島根県立大学)はモンゴルに進入したカザフ人について論じ、佐藤憲行氏(復旦大学)は、モンゴル人住民と漢人移住者の通婚に対する清朝の政策対応を論じた。「変動と越境の構図」セッションでは、岡洋樹(東北大学)が清朝の「封禁政策」の實在に疑問を提起し、堀江典生氏(富山大学)が社会主義体制崩壊後のロシア側の中国人労働移民観を論じた。これらの報告から、変動期の移動の様態、中国と、ロシア・モンゴルの人口学的非対称性、社会の文化的多様性と共生の構造といった問題が人とモノの流れの構造的背景を形成していたことが指摘された。

(岡 洋樹)



BOOKS 著書紹介

センター関連出版物

東北アジア研究専書第8号
尿尿をめぐる近世社会
—大坂地域の農村と都市—



荒武賢一 著 2015年1月
清文堂出版

本書は、17世紀から19世紀の都市大坂でおこなわれていた尿尿取引を主題として、百姓一町人の関係を中心に社会形成を明らかにしている。大都市の排泄物が近郊農業の肥料となり、それをもとに野菜が作られ、町人たちの食卓に並ぶ。この一連の過程は、リサイクル社会が近世日本に誕生していたことを証明し、環境を強く意識する現代に至って高い評価を受けている。

しかし、経済史の観点からみれば、どうだろうか。清潔な都市空間を作り上げた結果よりも重要な事実気付く。そもそも尿尿は、売り手の町人、買い手である百姓の双方にとって貴重な「商品」だった。本書ではこの流通構造の成立と変化に注目し、農村と都市の対立と協調、行政機構の役割、そして近代初頭の衛生政策など、多様な分野につながる歴史を浮かび上がらせた。(荒武賢一)

日本史学のフロンティア1
—歴史の時空を問い直す—
2015年1月
日本史学のフロンティア2
—列島の社会を問い直す—
2015年2月



荒武賢一・太田光俊・木下光生 編
法政大学出版局

近代に生まれた日本史学は、研究が積み重ねられるなかで、いつしか暗黙の前提として、古代・中世・近世・近代といった時代区分を強く意識するようになった。また、個別分散化といわれる内向きの研究状況を作り出している。

これらの問題を克服するべく、本書第1巻は時代区分の変革、前近代の日本と世界をテーマとして、従来の枠組みを問い直す作業をおこなった。第2巻では、古代から近代に至る社会秩序の構築を検討し、生業・災害・資源保全の歴史分析を深めている。

共通の書名として「フロンティア」と「問い直す」を掲げたのは、これまでの日本史が堅持してきた通説を再考し、本来的にあるべき歴史研究の姿勢を切り拓くという意味を込めている。(荒武賢一)

東北アジア研究センター報告第17号
『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究



栗林均・海蘭(カイラン) 著
2015年2月

『満文原檔』は、2005年に台湾の國立故宮博物院から刊行された清太祖、太宗時代(17世紀前半)の檔案(政府公文書)の写真版資料集である。そこに収録されている大量の檔案は、主に満洲語で記されているが、モンゴルとの交渉文書など、モンゴル語の文書も散在している。

本書は『満文原檔』全10冊の中からモンゴル語文書全47件を抜き出し、それらの影印と見開きの形でモンゴル語のローマ字転写と日本語訳を付し、さらに巻末にモンゴル語の全単語索引、名詞語尾索引、動詞語尾索引を取めている。

巻頭には「『満文原檔』におけるモンゴル語文書について」と題する解題、さらに「『文書』のモンゴル文字の字形について」および「『文書』における表記のゆれについて」と題するモンゴル語の表記に関する2編の論考を収録している。

プロジェクト研究「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の活動成果のひとつとして公刊された。(栗林 均)

東北アジア研究センター叢書第55号
『初学指南』の研究
—18世紀の口語モンゴル語—



栗林均・斯欽巴圖(スチンバト) 著
2015年2月

『初学指南』は、清朝の乾隆甲寅(1794)年に富俊によって出版されたモンゴル語の会話学習書である。本文は満洲語の口語学習書『一百条』の満洲語をモンゴル語に訳したものであるが、そのモンゴル語はすべて満洲文字で表記されるという独特の体裁をもっている。本文は満洲文字表記のモンゴル語と白話体漢文の対訳で『一百条』の100話に2話を加えて全102話から成る。

モンゴル語の文献資料の多くは「モンゴル文語」という書き言葉で書かれており、モンゴル語の口語を記録した資料は極めて少ない。『初学指南』は満洲文字によって18世紀の口語モンゴル語を記録した極めて貴重な資料である。本書は、この文献の満洲文字表記モンゴル語の全文をローマ字転写して、白話体漢文を翻刻し、日本語の訳文を付けたもので、巻末にモンゴル語の全単語・全語尾の索引を付している。

プロジェクト研究「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の活動成果のひとつとして公刊された。(栗林 均)

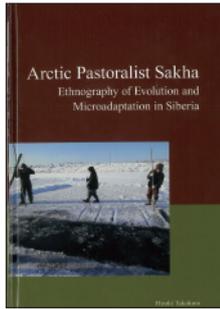
BOOKS 著書紹介

センター関連出版物

『Arctic Pastoralist Sakha: Ethnography of Evolution and Micro-adaptation in Siberia』

高倉浩樹著 2015年4月
Melbourne: Trans Pacific Press

本書は2012年出版の和書『極北の牧畜民サハシベリアにおける進化とマイクロ適応の民族誌』(昭和堂)の英語版である。シベリア人類学研究では、トナカイ牧畜民のエヴェンキやチュクチ人等の民族誌は英語やロシア語で刊行されてきたが、本書が焦点をあてたサハ人の民族誌書籍は意外に少ない。それはこの民族が、内陸アジアに起源をもち、シベリアにあって例外的に牛馬牧畜の伝統を持っていることも関係している。その意味で本書は北シベリアと内陸アジアの文化交流史を紐解くものであり、同時にトナカイ牧畜と彼らの牛馬牧畜を踏まえた極北適応に関する生態人類学的な理論的考察も含まれている。刊行するにあたっては、科研費の出版助成を受けた。(高倉浩樹)

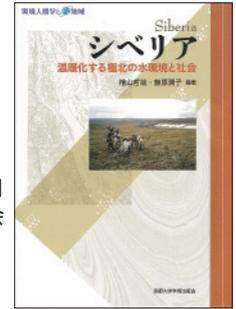


シベリア:温暖化する極北の水環境と社会

檀山哲哉・藤原潤子編 2015年3月
京都大学出版会

人間が暮らす場所としては世界で最も寒いシベリア。特有の自然と文化をはぐくんできたこの地は、温暖化の影響が最も顕著に現れると予測される地域でもある。凍結と融解を繰り返すシベリアの水環境は、どのように変化しつつあるのだろうか。その変化を人々がどう認識し、どのように適応しようとしているのだろうか。総合地球環境学研究所の文理融合プロジェクトによって書かれた本書は、トナカイ、永久凍土、洪水、適応政策、民族的世界観など、様々なトピックスを取り上げ、科学知・伝統知の双方からこの問題を概観するものである。

なお、本書には、東北アジア研究センター高倉浩樹、石井敦両氏の論稿も収められている。(藤原潤子)



●客員教授
ゲイル・フオンダール

ゲイル・フオンダール教授は、カナダのノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学の文化地理学を専門とする研究者である。現在、同大学の副学長(研究担当)でもあり、また国際極北社会科学学会(IASSA)の会長を務め、国際的なシベリア地域研究を牽引する一人である。最近、法地理学の観点から極北圏の先住権と開発に関わる諸問題についての研究を進めている。近刊として「第2次北極人間開発報告」(AHDR-II) [共編]がある。

ソ連崩壊前後から、彼女はシベリアでの現地調査を行っており、先駆的に英語での論文を刊行されていた。筆者が大学院生時代に調査テーマも近かったため、メールなどを通して研究相談したのが交流の始まりである。その後、国際学会などで会う機会

をえていたが、2013年4月からは国際北極科学委員会(IASC)の人文社会作業部会で私自身日本選出委員として仕事をすることになり、そこで同じ委員だったフオンダールさんに再会した。その縁がもとになって今回の招へいとなった。

来日して一月半が過ぎようとしているが、すっかり仙台での生活にも慣れたようである。折しも、今年の4月下旬には国際北極科学委員会の主催する北極科学サミット週間が富山で開催された(東北大学も後援)。フオンダールさんは国内外の関係する研究者に東北アジア研究センターの宣伝をしてくれたようだ。残り半分となった滞在期間だが、研究会などの活動を通してさらに多くの研究交流を行う予定である。

(高倉 浩樹)



●助教
藤岡 悠一郎

私はこれまで、アフリカ大陸南部に位置するナミビア国を対象に、乾燥地域に暮らす農牧民の生業変容と自然環境の変化に関する研究を進めてきました。博士課程(京都大学)では、ナミビア北部に暮らすオヴァンボ人の農地に成立する林(アグロフォレスト)に興味を持ち、近年の社会経済変動にともなう住民の樹木利用の変化を調査し、アグロフォレストの変化との関係性を明らかにしました。その後、JICAとJSTが進める地球規模課題対応科学技術協力(SATREPS)プログラム「半乾燥地の水環

境保全を目指した洪水-干ばつ対応農法の提案」に参画し、ナミビア北部地域を対象に、近年の気象災害が住民の生業に及ぼす影響を調査し、新しい農法を提案するという研究を進めています。具体的には、これまで利用されてこなかった小湿地に注目し、新規導入作物であるイネと現地の在来作物であるトウジンビエを混作する新しい農業技術を現地の住民とともに考えています。今後は東北アジア地域における生業研究を開始し、アフリカとの比較を視野にいたした地域間比較研究を進めていく予定です。

客員紹介

新任紹介

活動
風景

「Kuzushiji」と国際交流

東北アジア研究センター准教授 荒武 賢一朗

筆者は江戸時代から明治時代前期にかけての日本史を中心に研究を進めている。東北アジア研究センターに着任した2012年からは、宮城県下を中心に歴史資料の保全活動を積極的におこない、古文書の調査・研究に取り組んできた。そのなかで何より欠かせない技術は、江戸時代の人々が書き残した「くずし字」を解読することである。ご承知の通り、現代日本の義務教育でほとんど学習することのない古文書の原文解読を学ぶ場は限られている。かつての「日本語」でありながら、英語よりも接することは少ないだろう。

私自身も歴史研究者になることを志してから勉強を始めたような次第だが、そのうち大学の授業や社会人向けの市民講座で講師を務めるようになった。自分の研究以外にも世間で役立つ仕事ができることに喜びを感じたが、それはあくまで日本国内の話で、まさか海外でそのチャンスが巡ってくるとは思ってもよらぬ、である。結果、2013年9月のドイツ・ハイデルベルク大学、2014年6月にはアメリカ・シカゴ大学（2014年6月）、そして今回はドイツ・ベルリン自由大学で古文書解読のワークショップを開催した。

2015年3月2日から6日までの5日間、ベルリンでは25名の受講者が席を並べた。所属の内訳をみると、主催のベルリン自由大学から参加した教員・大学院生・学生が過半数を占めたが、ドイツ国内やイギリスの大学から、そして日本からも出席者がおられた。いずれも日本への留学・滞在経験を有し、くずし字を取り組むので当然ながら日本語の堪能な諸氏である。2013年9月のワークショップで顔を合わせた面々や、中級・上級レベルの熟練者も含まれているが、初めてくずし字に目を通す参加者が関心を持ってくれそうな授業を心掛けた。テキストには、幕末期から明治時代前期にかけての公文書や寺院・神社の所蔵文書、商人たちの取り交わした証文などを選んだ。短期の集中講義のため時間は限られているものの、塩竈神社の儀礼関係や、明治維新で活躍した木戸孝允の手紙など、当時の日本社会や文化を理解する一助となる資料をもとに、解読の方法や時代背景を縷々述べた。



ベルリン自由大学キャンパス

「Kuzushiji Workshop」に集まる人々と交流するなかで、日本では見落としていたことにたびたび気付かされる。その



2015年3月 ベルリン自由大学ワークショップの面々

第一は、くずし字解読は領域を横断する研究技術であることだ。私が学び始めたのは前述のように歴史を研究するためだったが、ワークショップの参加者は歴史学・美術史・文学・言語学・宗教学など多方面からやってくる。たとえば、浮世絵や古典文学を分析する、日独の人物交流を解き明かす、仏教思想を学ぶ、といったようなさまざまな専門テーマを手掛けた研究者たちの共通項はくずし字の習得だった。知らず知らずのうちに自身の狭い範囲を作り、古文書の解読は日本史のためにやるという意識を勝手に持っていたことは恥じ入るばかりである。江戸時代や明治時代の日本を研究するすべての人々に有益な技術を私たちは共有できる。そのことを遠くドイツやアメリカで体得した。

近年、遅れていると指摘されてきた古文書のデジタル化が進歩を遂げつつある。インターネットに接続できれば、わざわざ日本に調査へ出向くことなく、世界各地で資料を閲覧することができる。もちろんごく一部であるが、ひとむかし前に比べれば、海外在住の日本研究者には大変喜ばしい状況だろう。しかし、画像で原文書を手に入れることができても、読めなければ宝の持ち腐れである。公刊される書籍や資料集とともに、原文書を解読することで研究は大きな飛躍をみせるはずだが、世界各地の優秀な日本研究者がくずし字解読をそつなくこなし、後進の研究者へ引き継いでいくことでデジタル化の意味は一層重みを増すだろう。つまり、日本に関心をもって文化研究を進める人材育成に貢献することが私たちに求められている。

講義だけでは物足りない感じがするが、その思いを解消してくれたのは期間中のチュートリアル（個別テーマに関する相談）と、ワークショップ翌日に開催されたシンポジウム（受講者たちの研究発表）だった。いずれも主催者の賢明な計画によるものだが、数日間にわたってともに学ぶ者同士がそれぞれの成果を披露し、一緒に議論をすることでこの学術交流の意義はさらに高まった。発表者たちから、何故くずし字を学ぶのか、という問いかけへの答えが語られたことに深い感銘をおぼえている。

編
集
後
記

今年度最初のニュースレターをお届けします。ポスター発表や展示の記事がみられますが、私も最近、温泉旅館が所蔵している古文書の展示を手掛けました。年代、テーマ、さらにはどのような人が見学するのかを考えながら展示資料を選定しました。普段何気なく見て楽しんでいる展示ですが、いざ自分が企画する側になると、資料の面白さを伝える苦労や難しさが身に染みてわかりました。（高橋陽一）

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター 第 65 号 2015年6月26日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

発行 東北大学東北アジア研究センター 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>



植物油インキを使用し、環境にやさしい水なし印刷方式を採用しています。